第２章 『弥勒経』と敦煌第249窟の窟頂壁画

第１節　本窟の研究史

敦煌莫高窟 第249窟（西魏）の窟頂壁画に対する今日までの見解を整理してみると、ほぼ以下の3種に分けることができる。

一　漢民族の伝統的な神話にもとづく東王公、西王母等を題材とする[1]。

二　中国古来の伝統形式を用いて仏教の諸天部の帝釈天､帝釈天妃を表現したとする[2]。

三　兜率天往生と羽化昇仙を合わせたものとする[3]。

一では東王公、西王母が描かれていることを根拠とし、のち、それぞれ男女の上士が昇仙する姿としてとらえる[4]。図はたしかに中国的天子とその妃を表わしているが、東王公と西王母の物語が、他の壁面の関係でどのように結びつくか示されていない。

二では阿修羅と須弥山上の刀利天宮を根拠とし、阿修羅王が帝釈天と闘う故事を導入する。しかし故事では帝釈天妃は記されていない。また阿修羅が須弥山を支えて立つ図像は、後の代になるとしばしば見られるが、日天月天を手に持つ多臂の神像は、当時シヴァ神やヴィシュヌ神としても仏教図像に現われており、これが阿修羅であるとする決め手を欠いている。

三では仏教と黄老思想(道教)の融合とみて、須弥山上の阿修羅も、東王公､西王母もそのまま認定する。しかし兜率天往生の具体的説明はなされていない。その後、クチャ壁画の中で欄干上に描かれる弥勒と諸天図との類似性から、弥勒に関する禅定の図像に結びつくとの指摘がなされている[5]。

以上 三種の見解からみて、これまでは阿修羅と、東王公･西王母の二つを主な柱として、またこの二つを前提として、249窟の図像の解明がなされていたということである。

第249窟 窟頂西面のいわゆる正面本尊上に立ちはだかる多目多臂の神王像（図2-21）を阿修羅王であるとする根拠は『長阿含経』巻20-21や『正法念処経』巻20-21に述べる[6]、帝釈天が盟主の三十三天とともに戦闘する相手方の阿修羅王であるという。たしかに瞋恚が込み上げて刀利天上の日月を手にとる阿修羅王や、一手をもって日をさえぎり、日蝕を起こしたとの記述

---

[1] 孫作雲「敦煌画中的神怪画」(『考古』1960-6)。

[2] 樊錦詩,馬世長,関友恵「敦煌莫高窟北朝洞窟的分期」(『敦煌莫高窟』1,文物出版社･平凡社,1980,p.210)，段文傑「道教題材是如何進入佛教石窟的」(『1983年全国敦煌学術討論会文集』石窟芸術編上,甘粛人民出版社,1985所収)，吉村怜「敦煌石窟における天人像の系譜」(『国華』1177,1993)。

[3] 東山健吾『敦煌石窟』(平凡社,1982,p.230)。

[4] 寧強「上士登仙図与維摩詰経変」(『敦煌研究』1990-1)。

[5] 宮治昭『涅槃と弥勒の図像学』(吉川弘文館,1992,p.450)。

[6] 後秦･仏陀耶舎,竺仏念訳『長阿含経』(『大正蔵』1,1924,p.129-144),元魏･霍曇般若流支訳『正法念処経』(『大正蔵』17,1925,p.114-124)。

をもって阿修羅王とすることはできる。しかし、二経ではいずれも武装した阿修羅王とその軍隊が勇ましく登場する。これらは壁面上では見えない。これを帝釈天側（王・王妃とその衆）だけに充てるとすれば、やはり不自然である。また上述したが、帝釈天に天妃が登場するとの記載はない。したがって、賀世哲氏が「風神、雷神とともに描かれた阿修羅王が、これらとどのような関係にあるかを詳説した論文をまだ見ていない」と指摘する通り[7]、壁画全体からの整合性ある説明はなされていないのが現状である。

図像上の遺例でみると、雲岡石窟第10窟前壁に、須弥山の両脇で共に日月を奉持する二体の阿修羅王が見える(図2-22）。ほかに敦煌石窟でも唐代の335窟や五代の61窟（図2-23）、99窟（図2-24）に同系統の図像がある。前2窟が『維摩経』の見阿閦品、後1窟が文殊菩薩の関係経にもとづき、いずれも阿修羅王の守護する須弥山を描いている[8]。第249窟の西魏窟も図像的には同じ系統らしく、大きな差はない。

ただ、上述した通り、日月を奉持する多目多臂の姿をもって阿修羅王であるとする点については、雲岡石窟第8窟（図2-25）、あるいは敦煌石窟第285窟にみえるシヴァ神（図2-26）や、ヴィシュヌ神でも、日月を奉持する神像として表わされており、軽々に阿修羅王一つに断定できないことになる。

また、雲岡第10窟の須弥山上に鹿などの動物の描かれている様子（図2-22参照）からみると、本窟で描かれる狩猟を楽しむ場面は、須弥山上の人間界ととらえることができる。ならば、この人間界上に立ちはだかる一大神像は、須弥山を下から支える阿修羅王とは異なる天上界（兜率天を含む）の一大神というべきであろう。

第２節　弥勒諸経典による照合

1. 『弥勒上生経』

第249窟があくまで仏教石窟として、これを基本に置いた場合、何らかの仏教経典に結びつく可能性はないであろうか。こう考えて、私は宋・沮渠京声訳『仏説観弥勒菩薩上生兜率天経』(略称して『弥勒上生経』という）に注目した[9]。以下の考察はその照合結果である。

（1）釈迦仏が舎衛国の給孤独園で、優波離に対して弥勒上生経を説いていく。本文は次のように記している[10]。

「その時優波離また座より起ち、頭面に礼を作して仏に白して言く……仏、優波離に告ぐ、諦に聴け諦に聴け、善くこれを思念すべし、如来は正遍知に応じて、今この衆において、

---

[7] 賀世哲「敦煌莫高窟第二四九窟窟頂西破壁画内容考釈」(『敦煌学輯刊』3,1983)。

[8] 敦煌文物研究所編『敦煌莫高窟』3,平凡社・文物出版社,1981,図61,解説および同5,図34,76,解説。

[9] 劉宋・沮渠京聲訳『観弥勒菩薩上生兜率天経』(『大正蔵』14, 1925,p.418-420)。

[10] 同上,(『大正蔵』14,p.418c),「尓時優波離亦従座起,頭面作礼而白仏言,……仏告優波離諦聴諦聴善思念之,如来応正遍知,今於此衆説弥勒菩薩摩訶薩阿耨多羅三藐三菩提記,此人従今十二年後命終,必得往生兜率陀天上,……」の文。

弥勒菩薩摩訶薩に阿耨多羅三藐三菩提の記を説く、此の人、今より十二年の後に命終し、必ず兜率陀天上に往生することを得ん。……」

第249窟 窟頂西面龕楯上に描く山岳上の左右に法堂があり、中で光背をつけ安座して法を説く一人物（左側)と、光背はなく同じく安座する一人物（右側)がいる。これを、この釈迦仏と優波離にあてる（図2-27）。

（2）釈迦は弥勒菩薩が12年後に往生する兜率天の様子を説きはじめる。ここには天子達(五百万億)の力で宮殿と垣牆と行樹が作られ、音楽を奏でる宝女と龍王がいて、一大神、牢度跋提がいる。彼は立ち上がり、額上の宝珠を取って、弥勒のための善法堂の造立を誓願する。本文は次のように記している[11]。

「一一の垣牆の高さ六十二由旬、厚さ十四由旬、五百億の龍王、此の垣を囲繞し、一一の龍王、五百億の七宝の行樹を雨らす。……その時、この宮に一大神あり、牢度跋提と名く、即ち座より起ちて遍く十方の仏を礼し、弘誓の願を発す。若し我が福徳応ぜば、弥勒菩薩のために善法堂を造らん、……」

―――窟頂西面中央上方に大きく立ちはだかる一神像をこの牢度跋提神として、その頭上の宝冠と両手の日月を宝珠と見る。そして腰にからまる双龍を龍王と見、上方の建物を善法堂とし、建物の周囲を垣牆と七宝の行樹と見る。

（3）宮殿の園中に八色の瑠璃渠があり、その中の宝珠から八味水が涌き、水は梁棟間を流れて四門の外で四花を化生し、花上に天女が出現する。本文は次のように記している[12]。

「時に諸の園中に八色の瑠璃の渠あり、一一の渠に五百億の宝珠あり、而して用って合成す、一一の渠中に八味の水あり、八色具足し、其の水上、梁棟の間に湧游す、四門の外において四花化生す、水、華中に出でて宝花の流るるが如し、一一の華上に二十四天女あり……」

―――窟頂を四方から支える梁は、この天井四角に四花を見出すことから、文中の瑠璃渠を指すものといえる。

（4）四角を四蓮華で飾った七宝の大師子座と、衆宝で荘厳された宝帳が出現する。十方の(百千)梵王が、この宝帳に宝鈴をかけ、小梵王がこれを羅網で覆い、天子天女が宝華を敷くと、ここに宝女・宝柱・楼閣・絞絡・天女・楽器が次次と現われる。本文は次のように記している[13]。

---

[11] 前掲注9,(『大正蔵』14, p.419a),「一一垣牆高六十二由旬厚十四由旬,五百億龍王囲繞此垣,一一龍王雨五百億七宝行樹,……尓時此宮有一大神,名牢度跋提,即従座起遍礼十方仏,発弘誓願,若我福徳応為弥勒菩薩造善法堂,……」の文。

[12] 同上,(『大正蔵』14,p.419a),「時諸園中有八色瑠璃渠,一一渠有五百億宝珠而用合成,一一渠中有八味水,八色具足、其水上湧游梁棟間,於四門外化生四花,水出華中如宝花流,一一華上有二十四天女,……」の文。

[13] 前掲注9,(『大正蔵』14,p.419b),「亦有七宝大師子座,高四由旬,閻浮檀金無量衆宝以為荘厳,座四角頭生四蓮華,一一蓮華百宝所成,一一宝出百億光明,其光微妙化為五百億衆宝雑花荘厳宝帳,

「また七宝の大師子座あり。高さ四由旬、閻浮檀金、無量の衆宝、もって荘厳をなす。座の四角の頭に四蓮華を生ず。一一の蓮華、百宝を所成す。一一の宝、百億の光明を出だす。其の光、微妙にして化して五百億の衆宝、雑花、荘厳の宝帳となる。時に十方面の百千の梵王、各各、一梵天の妙宝を持ちて、もって宝鈴となして宝帳上に懸く。……時に諸閣の間に百千の天女あり。色妙無比、手に楽器を執る。……」

―――窟頂東面中央に二人の梵王に支えられた師子座と宝帳・宝柱があり、二天女(宝女)が左右に舞う。梵王の左下に逆立ちする同形の子供が、恐らく小梵王であろう（図2-28）。

（5）つぎに兜率天宮にいる五大神についてのべる。1 に身体から七宝を雨らし、無量の楽器を化成する宝幢。2 に身体から衆花を雨らし、幢幡の導引で宮牆を覆う花蓋を化成する花徳。3 に身毛から栴檀香を出し、宮を七匝に巡らせる香音。4 に如意珠を雨らし、その如意珠が幢幡上で法を説く喜楽。5 に身毛から衆水を出し、水上に華を生じ、華上に玉女が出て音楽を奏でる正音声、の五大神である。本文は次のように記している[14]。

「時に兜率天宮に五大神あり。第一の大神を宝幢と名づく。身より七宝を雨らし宮牆内に散ず。一一の宝珠化して無量の楽器と成る。空中に懸処し鼓せずして自ら鳴る。無量の音あり。衆生の意に適う。第二の大神を名けて花徳と曰う。身より衆花を雨らす。宮牆に弥ち覆い、化して花蓋を成す。一一の花蓋に百千の幢幡、以って導引を為す。第三の大神を名けて香音と曰う。身の毛孔中より微妙海此岸栴檀香を雨らし出す。其の香り、雲の作す百宝の色の如し。宮を遶ること七匝。第四の大神を名けて喜楽と曰う。如意珠を雨らす。一一の宝珠、自然に幢幡之上に住在す、無量の帰仏・帰法・帰比丘僧を顕説す。五戒を説くに及び、無量の善法、諸波羅蜜、饒益し菩提の意ある者を勧め助く。第五の大神を名けて正音声と曰う。身の諸毛孔より衆水を流出す。一一の水上に五百億の花あり。一一の華上に二十五の玉女あり。一一の玉女、身の諸毛孔より、一切の音声を出し、天魔に勝ち、后所に音楽有り」

―――窟頂の四面に角をつけ両足を大きくひろげた鬼神が5体見える。西の正面中央一大神の左右に2体。左の多数の小太鼓を回すいわゆる雷神は、身体の七宝を無量の楽器に化成する第１の宝幢にあてることができる。右の風袋を担ぐいわゆる風神は、宮牆の下で幢幡を担ぐ第２の花徳神とする。この右隣窟頂北面の左端中ほどに見える、右手に香具らしき道具を持つ一体

時十方面百千梵王,各各持一梵天妙宝,以為宝鈴懸宝帳上,……時諸閣間有百千天女,色妙無比手執楽器,……」の文。

[14] 同上,(『大正蔵』14,p.419b-c),「時兜率天宮有五大神,第一大神名曰宝幢,身雨七宝散宮牆内,一一宝珠化成無量楽器,懸処空中不鼓自鳴,有無量音適衆生意,第二大神名曰花徳,身雨衆花弥覆宮牆化成花蓋,一一花蓋百千幢幡以為導引,第三大神名曰香音,身毛孔中雨出微妙海此岸旃檀香,其香如雲作百宝色遶宮七匝,第四大神名曰喜楽雨如意珠,一一宝珠自然住在幢幡之上,顕説無量帰仏帰法帰比丘僧,及説五戒,無量善法諸波羅蜜,饒益勧助菩提意者,第五大神名曰正音声,身諸毛孔流出衆水,一一水上有五百億花,一一華上有二十五玉女,一一玉女身諸毛孔,出一切音声勝天魔后所有音楽」の文。

（図2-29）を、栴檀の香りを出す香音神とし、その右隣東面中央やや下方に宝帳と師子座を支える梵王の下で両足をひろげる一体を、特に決め手はないが、如意珠を雨らすとそれが帰法・帰仏・帰比丘を説くという喜楽神にあてる。その右隣南面の右端中央に見える天女の下に青いスクリュー状の水玉を飛ばす一体（図2-30）を、天女を奏楽の玉女と見れば、正音声神となろう。このように考えると、修行者が天井を右遶して観ていく順で、五大神が描かれていることが知られる。

2. 『弥勒下生経』等

『弥勒上生経』では、上記の記述のあと釈迦と優波離の対論の中で、弥勒がバラモンの家に生まれ兜率天に昇り成道したといい、我々衆生もこの兜率天で弥勒に知遇し、56億万年ののち弥勒に従って閻浮提に下生するが、このことは『弥勒下生経』に説く通りであるとのべている。本文は次のように記している[15]。

「仏憂波離に告ぐ、弥勒は先に波羅捺国・劫波利村・波婆利の大婆羅門の家に生まれ、劫後の十二年二月十五日に、本生の処に還り、結加趺坐して入滅すること定身の如し。紫金色の光明、艶赫百千の日の如くして、上兜率陀天に至る。……是の処、兜率陀天の如く、昼夜に恒に此の法を説き、諸天子を度す。閻浮提の歳数、五十六億万歳。尓、乃ち閻浮提に下生し、弥勒下生経に説くが如くせよ」

この記述を根拠とすれば、『弥勒上生経』は『弥勒下生経』の後、これをふまえて作成されたと考えられるので、以下残された窟画の図像を『弥勒下生経』をもとに考察してみたいと思う。

（6）鳩摩羅什訳の『仏説弥勒下生成仏経』(略称して『弥勒下生成仏経』という）[16] では、弥勒の出現する国土において転輪聖王の蠰去と、その妃舎弥婆帝がそれぞれ臣下や侍女とともに弥勒の下に参じて出家・学道する様子が記されている。本文は次のように記している[17]。

「その国にその時、転輪王あり。名けて蠰去と曰う。四種の兵あり。もって威武せずして四天下を治む。……その城の中に大婆羅門主あり。名けて妙梵と曰う。婆羅門の女、名けて梵摩波提と曰う。弥勒託生してもって父母と為す。……時に蠰去王、また八万四千の大臣と共なり。恭敬囲繞して出家学道す。……蠰去王の宝女、名舎弥婆帝、今の毘舎去これなり。また八万四千の采女と共に出家す」

---

[15] 前掲注9,(『大正蔵』14,p.419c),「仏告憂波離弥勒先於波羅捺国劫波利村波婆利大婆羅門家生,却後十二年二月十五日,還本生処結加趺坐如入滅定,身紫金色光明艶赫如百千日,上至兜率陀天,…(中略)…如是処兜率陀天昼夜恒説此法,度諸天子,閻浮提歳数五十六億万歳,尓乃下生於閻浮提,如弥勒下生経説」の文。

[16] 後秦・鳩摩羅什訳『弥勒下生成仏経』(『大正蔵』14,p.423c-425c)。

[17] 同上,(『大正蔵』14,p.424a-c),「其国尓時有転輪王名曰蠰去,有四種兵不以威武治四天下,…(中略)…其城中有大婆羅門主,名曰妙梵,婆羅門女名曰梵摩波提,弥勒託生以為父母,…(中略)…時蠰去王亦共八万四千大臣,恭敬囲繞出家学道,……蠰去王宝女名舎弥婆帝,今之毘舎佉是也,亦与八万四千婇女俱共出家」の文。

―――第249窟 窟頂の北面と南面に龍車と鳳車に乗りそれぞれ従者を連れた、いわゆる東王父と西王母が見える。この王と王妃は、実はこの蠰去王とその宝女(妻)[18] を表わしているのではあるまいか。隋代の弥勒浄土変相図として知られる第419窟の後部天井に、やはり同様の構図が見える（図2-31)。これは中央本尊の弥勒の会座に向かって、出家・聞法のために馳せ参じる蠰去王とその宝女(妻)の姿であるという裏づけになる。

この鳩摩羅什訳より前の、竺法護訳『仏説弥勒下生経』(略称して『弥勒下生経』という)[19] では、蠰去の王妃の出現がなく、王の大臣たる修梵摩長者とその妻梵摩越が弥勒の父母として示され、この夫妻がそれぞれ従者とともに弥勒の下で出家すると述べている。本文は次のように記している[20]。

「その時、法王出現す、名けて蠰去と曰う、……時に彼の王に大臣あり、名けて修梵摩と曰う、是の王の少小より同好し、王甚だ愛敬す、……是の時、修梵摩に妻あり、名く梵摩越と、王女の中に最極殊妙と為す、天帝の妃の如し、……その時、弥勒初めて八万四千人と会す、阿羅漢を得る、この時、蠰去王、弥勒の已に仏道を成ぜしを聞き、便ち往きて仏所に至り、法を聞くことを得んと欲す、……この時、修梵摩大長者、弥勒の已に仏道を成せしを聞き、八万四千の梵志之衆を将い、往きて仏所に至り、沙門に作らんと求む、阿羅漢を得て、……この時、仏母梵摩越、復た八万四千の采女之衆を将い、往きて仏所に至り沙門とならんことを求む」

描かれた王と王妃が蠰去王夫妻か、弥勒の父母夫妻か、ここで説の分かれるところとなる。描かれた兜率天の場は、一般的にいえば、天上の天帝や天帝妃の世界である。すなわち『弥勒上生経』でいう兜率天に往生して、弥勒とともに閻浮提に下生する五百万億の天子・天女のいる場所である。本文は次のように記している[21]。

「その時、兜率陀天上に、五百万億の天子あり。一一の天子みな甚深の檀波羅蜜を修む。一生補処の菩薩に供養をなす故に。……一一の閻浮檀金光中に、五百億の諸天の宝女を出す。……諸の欄楯の間に自然に九億の天子、五百億の天女化生す」

――ここに東王父・西王母として描写される素因があると思われるが、具体的には上記双方い

---

[18] 渡辺照宏『愛と平和の象徴－弥勒経』(筑摩書房,1966,p.131)で,「蠰去王宝女名舎弥婆帝」を,「天輪聖王の寵愛する妃シャーマヴァティー」と訳し,宝女に妃(妻)の意があるとしている。

[19] 竺法護訳『仏説弥勒下生経』(『大正蔵』14,p421a-423c)。

[20] 同上,(『大正蔵』14,p421b-422b),「尓時法王出現,名曰蠰去,……尓時彼王有大臣名曰修梵摩,是王少小同好王甚愛敬,……是時修梵摩有妻名梵摩越,王女中最極為殊妙,如天帝妃,…(中略)…尓時弥勒初会八万四千人得阿羅漢,是時蠰去王,聞弥勒已成仏道,便往至仏所欲得聞法,……是時修梵摩大長者,聞弥勒已成仏道,将八万四千梵志之衆,往至仏所求作沙門,得阿羅漢,……是時仏母梵摩越,復将八万四千婇女之衆,往至仏所求作沙門」の文。

[21] 前掲注9,(『大正蔵』14,p.418c-419a),「尓時兜率陀天上,有五百万億天子,一一天子皆修甚深檀波羅蜜,為供養一生補処菩薩故,……一一閻浮檀金光中,出五百億諸天宝女,……諸欄楯間自然化生九億天子,五百億天女」の文。

ずれでも理解できることになる。ただ、竺法護訳でも梵摩越が王女中最極で天帝の妃のようだと記しているので、羅什訳が流布してより以降は、いっそう王と王妃が示される可能性が高くなったといっていいであろう。

(7) この蠰去王の治下に四大蔵と四大龍王が出現する。本文は次のように記している[22]。

「また四大蔵あり。……この四大蔵の縦横、広さ千由旬、中に珍宝を満たす。各四億の小蔵ありてこれに附す。四大龍王あり。各自ら守護す」

———窟頂東面の左下に背に四角い蔵を乗せた龍がおり、さらに同壁の右端と北面、南面の三所で九頭龍が見出される。単なる龍王でなく、四大龍王と形容する点を九頭龍表現として見れば、この四龍が経典の記述に関係することが考えられる。

(8) 『弥勒下生成仏経』や鳩摩羅什訳の『仏説弥勒大成仏経』(略称して『弥勒大成仏経』という) [23] では、衆鳥和集、鵝・鴨・鴛鴦・孔雀・翡翠・鸚鵡・舎利・鳩那羅耆婆等の鳥名が記されている。本文は次のように記している[24]。

「其の池の四辺に四宝の階道あり。衆鳥和集す。鵝鴨・鴛鴦・孔雀・翡翠・鸚鵡・舎利鳩・那羅耆婆・耆婆等。諸の妙音の鳥常に其の中に在り。復た異類の妙音の鳥有り。あげて数うるべからず」

「時にかの国界の城邑・聚落・園林・浴池・泉河・流沼に、自然に八功徳水有り。命命の鳥、鵝鴨・鴛鴦・孔雀・鸚鵡・翡翠舎利・美音鳩鵂・羅耆婆闍・婆快見鳥等、妙声を出す。また異類妙音の鳥あり。あげて数うるべからず。林池に遊集す」

———窟頂東面二梵王の左右に見える２羽の鳥や、西面一大神の腰部左方と、北面五大神の下に見える人面鳥などは、恐らくこれらの関係から描かれたものであろう。

(9) 『弥勒大成仏経』では、また四天王と梵天・帝釈が明記され、強調されている。本文は次のように記している[25]。

「その時釈提桓因、護世天王、大梵天王、無数天子とともに、花林園において頭面に礼足し、合掌し法輪を転ずることを勧め請う、時に弥勒仏、黙然として請を受く…時に壌去王、

---

[22] 前掲注16,(『大正蔵』14,p.424a),「又有四大蔵,……此四大蔵縦横広千由旬,満中珍宝各有四億小蔵附之,有四大龍王各自守護」の文。

[23] 鳩摩羅什訳『仏説弥勒大成仏経』(『大正蔵』14, 1925,p428b-434b)。

[24] 同上,(『大正蔵』14,p424a),「其池四辺四宝階道,衆鳥和集,鵝・鴨・鴛鴦・孔雀・翡翠・鸚鵡・舎利・鳩那羅・耆婆耆婆等,諸妙音鳥常在其中,復有異類妙音之鳥,不可称数」の文,および『大正蔵』(14,p429c),「時彼国界城邑聚落,園林浴池泉河流沼,自然而有八功徳水,命命之鳥鵝鴨鴛鴦,孔雀鸚鵡,翡翠舎利,美音鳩鵂,羅耆婆闍婆快見鳥等,出妙音声,復有異類妙音之鳥,不可称数,遊集林池」の文。

[25] 同上,(『大正蔵』14,p430c-431b),「尓時釈提桓因護世天王,大梵天王無数天子,於花林園頭面礼足,合掌勧請転於法輪,時弥勒仏黙然受請,…(中略)…時壌去王与八万四千大臣恭敬囲繞,及四天王送転輪王,至花林園龍花樹下,詣弥勒仏求索出家,……時四天王各各将領無数鬼神,……」の文。

八万四千の大臣と恭敬囲繞し及び四天王と転輪王を送り、花林園の龍花樹下に至り、弥勒仏に詣で出家を求索す……時に四天王各各無数の鬼神を将領して、……」

———窟頂西面中ごろの左右に小さく描く羽毛をつけた鬼神 2体と、東面左右大龍王の脇にいる同様の2体が相対して計4体となるので、これが四天王であろう。また窟頂南面右下と北面左下に羽衣をつけて飛ぶ2体が見える。これが梵天・帝釈の二天であろうか。

（10）竺法護訳の『弥勒下生経』では羅刹鬼葉華が、また鳩摩羅什訳の『弥勒下生成仏経』では大夜叉神、跋陀波羅余塞迦が翅頭城の守護者として登場する。本文は次のように記している[26]。

「この時、翅頭城の中に羅刹鬼あり、名を葉華と曰う、所行法に順い、正教違わず、毎に人民に向かい寝寐の後、穢悪不浄の者を除去す、常に香汁を以って其地に灑ぎ、極めて香浄と為す」

「大夜叉神あり、跋陀波羅余塞迦と名づく、常に此の城を護り、掃除清浄す、もし便利不浄有らば、地裂け之を受く」

———窟頂西面右下の猪頭の鬼神が羅刹鬼葉華として、また南壁東端上部の欄楯左端の巨大な人物の顔（図2-32）が翅頭城の守護者大夜叉神、跋陀波羅余塞迦としてみると、いかにもふさわしいように思われる。

第３節　龍華三会説法

（11）第249窟では、西面中央に主尊の倚座の彫像があり、左右に菩薩の彫像が各一体ある。さらに主尊の龕外、西壁下左右に各一体の彫像があった形跡がある(今はない)。そして、窟内南北両壁下方中央に、それぞれ千仏に囲まれ左右各二体の菩薩と天子天女に供養され説法する仏の立像が描かれている。———これらの相似する仏説法図を『弥勒下生経』経典に説く龍華の三会説法図として理解してみたいと思う。本文は次のように記している[27]。

「その時弥勒の初会に、八万四千人が阿羅漢を得たり。是の時蠰去王、弥勒が已に仏道を成ぜしと聞き、便ち往きて仏所に至り、法を聞かんと欲す。時に弥勒仏、王に法を説く。……此れを名づけて最初の会となす。九十六億人皆阿羅漢を得たり。弥勒仏の第二会の時、九十四億人あり。みな是阿羅漢、またまたこれ我が遺教の弟子、四事を行じ、供養し致す所なり。また弥勒の第三の会、九十二億人、みなこれ阿羅漢なり」

すなわち、倚座本尊の正面仏龕内を、下生し説法する弥勒の龍華樹下における初会の場面と

---

[26] 前掲注19,(『大正蔵』14,p421a),「是時翅頭城中有羅刹鬼名曰葉華,所行順法不違正教,毎向人民寝寐之後,除去穢悪不浄者,常以香汁而灑其地極為香浄」の文,および前掲注16,(『大正蔵』14,p424a),「有大夜叉神名跋陀波羅賒塞迦,常護此城掃除清浄,若有便利不浄,地裂受之」の文。

[27] 前掲注19,(『大正蔵』14,p422a-c),「尓時弥勒初会八万四千人得阿羅漢,是時蠰去王,聞弥勒已成仏道,便往至仏所欲得聞法,時弥勒仏与王説法,…(中略)…此名為最初之会。九十六億人皆得阿羅漢。……弥勒仏第二会時,有九十四億人。皆是阿羅漢,亦復是我遺教弟子。行四事供養之所致也。又弥勒第三之会,九十二億人皆是阿羅漢」の文。

し、左右の説法図（図2-33）を二会、三会とする。礼拝者が右遶することからいえば、この場合も北壁が二会、 南壁が三会であろう。

（12）主尊を見ると、清代の補修が加えられているにしても[28]、頭部が僧形であることに興味がひかれる（図2-21参照)。『弥勒下生経』の主題は､弥勒とそこに参集する人々の出家にあるからである。

（13）主尊の仏龕下方左右に婆羅門が二体描かれている。弥勒がバラモン出身であることと関係するのであろうか、初会において出現する大迦葉や賓頭盧尊者は、いずれもバラモン出身である。大迦葉の場合、頭陀行による骨身化とある記述からみて、右側肋骨むき出しのバラモン修行者がこれにあてはまるようである。本文は次のように記している[29]。

「しかるに今、如来に四大声聞有り、堪えて遊化に任せ、智恵無尽、衆徳具足す。云何が四となす。その時、阿難、弥勒如来、まさに迦葉の僧伽梨を取りてこれを著す。この時、迦葉の身体、奄然として星散す」

「その時、弥勒仏の諸の弟子、普くみな端正にして威儀具足し、生老病死を厭う。……その時、弥勒仏、長老大迦葉の所に往かんと欲す。即ち四衆と倶に耆闍崛山に就き、山の頂上において大迦葉に見ゆ。……弥勒仏、大迦葉の骨身を讃じて言わく、善き哉、大神徳師子、大弟子大迦葉よ、彼の悪世においてよくその心を修せよ」

（14）主尊の仏龕龕楯に描く中央の鬼神は、龕楯が龍華に見立ててあるところからいえば、おそらく『弥勒下生経』にいう魔王大将であろう。本文は次のように記している[30]。

「その時、魔王大将と名づく、法を以て治化す。如来の名、音響の声を聞き、歓喜踊躍し、自ら勝う能わず。七日七夜、不眠不寐、この時、魔王、欲界の無数の天人を将い、弥勒仏の所に至り、恭敬し礼拝す」

第４節　説法の内容と図像

弥勒経典では、各要所で説法の内容を明らかにしているので、この点をまとめてみよう。はじめに『弥勒上生経』に示す説法の内容を見てみると、

1. 兜率天の天宮垣牆上で龍王の化成した行樹が苦・空・無常・無我・諸波羅蜜を演説する。
2. 兜率天宮殿周囲の宝女や諸光の奏でる音楽が、不退転地・法輪之行や大慈大悲法を演説

---

[28] 『敦煌莫高窟』1, (前掲注2),図89解説。

[29] 前掲注19,(『大正蔵』14,p.422b-c),「然今如来有四大声聞堪任遊化智慧無尽衆徳具足,云何為四,所謂大迦葉比丘,屠鉢歎比丘,賓頭盧比丘,羅云比丘,汝等四大声聞,……今日現在頭陀苦行最為第一……尓時阿難,弥勒如来当取迦葉僧伽梨著之,是時迦葉身体奄然星散」の文, および前掲注16,(『大正蔵』14,p.425b-c),「尓時弥勒仏諸弟子,普皆端正威儀具足,厭生老病死,……尓時弥勒仏欲往長老大迦葉所,即与四衆倶就耆闍崛山,於山頂上見大迦葉,……弥勒仏讃大迦葉骨身言,善哉大神徳釈師子大弟子大迦葉,於彼悪世能修其心」の文。

[30] 前掲注19,(『大正蔵』14,p.421c),「尓時魔王名大将以法治化,聞如来名音響之声,歓喜踊躍不能自勝,七日七夜不眠不寐,是時魔王将欲界無数天人至弥勒仏所,恭敬礼拝」の文。

する。

3. 一大神の善法堂造成ののち、宝宮上の天女の奏でる楽器が、十善・四弘誓願を演説する。

4. 天井梁棟四花上の天女の纓絡が楽器となり、菩薩の六波羅蜜を讃歎する。

5. 師子座と宝帳出現ののち、宝女の執る楽器が苦・空・無常・無我・諸波羅蜜を演説する。

6. 五大神の喜楽の雨らす宝珠が、帰仏・帰法・帰比丘僧および五戒・無量善法・諸波羅蜜を顕説する。

7. 兜率天において弥勒の弟子となる者は思惟において、五戒・八斎戒・具足戒・身心精進・不求断結・修十善法の正観をなす。

8. 兜率天に往生した弥勒の身光中に、首楞厳三昧・般若波羅蜜が見える。

9. 成道を遂げた弥勒の相から出る光明の雲が、昼夜にわたって常に不退転地・法輪之行を説く。

10. 未来世における弥勒に帰依する者は、無上道において不退転を得、授記を得るという。

11. 他方来会の菩薩が首楞厳三昧を得、諸天が菩提心を起こし、弥勒に従って下生したいと願って終る。

つぎに『弥勒下生経』や『弥勒大成仏経』を見てみよう。

12. 翅頭城近くの龍華樹下で弥勒は無常の想を修して、夜半に出家して成道を遂げる。

13. 龍華樹下、華林園における初会説法で弥勒は、色受想行識・苦・空・無常・無我および三乗の法を説く。ここでそれぞれ八万四千の従者を連れた長者や蠰去王、王妃、梵志等が出家する。弥勒の父母も従者とともにこの会座に参じて出家する。大迦葉は頭陀行を行い弥勒の勧化を助け、その結果九十六億の人が阿羅漢果を得て弥勒の弟子となる。

14. 龍華樹下第二会で弥勒は四諦・十二因縁を説き、九十四億の人が阿羅漢果を得て弥勒の弟子となる。また他方の諸天八部衆等も菩提心を起こし不退の地に入る。

15. 龍華樹下第三会で弥勒は四聖諦・深妙法輪あるいは思惟の十想を説き、九十二億の人が阿羅漢果を得て弥勒の弟子となる。

16. 弥勒が十八神変を現じ一切衆生が解脱を得、梵天・帝釈・四天王がこれを讃歎して終る。

以上をまとめてみると、『弥勒上生経』では、仏法への絶対帰依と不退転の強調、そして首楞厳三昧・般若波羅蜜の獲得が目指されている。『弥勒上生経』の対告衆ウパーリ（優波離）は、釈尊の弟子の中でも戒律の権威として知られている。『増一阿含経』第三弟子品に、

「我が声聞中の第一の比丘、……戒律を奉持し觸犯する所無き、優波離比丘是なり」[31]

とある。したがって、この点を重ね合わせて理解することが可能である。すなわち石窟内上方四周に描かれる欄干上で、楽器を持つ天子・天女達の奏でる曲目が、恐らくこれを強調しているに相違ない。

また『弥勒下生経』では、弥勒の下での修行者の出家・求道と弥勒の三会説法が主題であった。三会説法図の周囲を埋める千体仏表現（図2-34）は、おそらくこの会に値遇し成道するそれぞれ九十億余の人々でもあり、また『弥勒上生経』に述べる、未来世において彼らの値遇す

---

[31] 東晋・霍曇僧伽提婆訳『増一阿含経』(『大正蔵』2,1924,p.557c),「我声聞中第一比丘,……奉持戒律無所觸犯優波離比丘是」の文。

る賢劫の一切諸仏であると見ていいと思う。本文は次のように記している[32]。

「是の如き等の衆生、もし諸業の行、六事の法を浄じ、必定して疑い無くんば、まさに生を於兜率天上に得て弥勒に値遇せん。また弥勒に随い閻浮提に下り第一に法を聞き、未来世に於いて賢劫の一切の諸仏に値遇せん。星宿劫に於いてまた諸仏世尊に値遇せんことを得て、諸仏の前に於いて菩提記を受けん」

と。したがって第249 窟は、結局弥勒に対する信仰の、壮大で意義ある図像として、その全体が構成されていたと理解されるわけである。

[32] 前掲注9,(『大正蔵』14,p.420a),「如是等衆生若浄諸業行六事法,必定無疑当得生於兜率天上値遇弥勒,亦随弥勒下閻浮提第一聞法於未来世値遇賢劫一切諸仏於星宿劫亦得値遇諸仏世尊於諸仏前受菩提記」の文。